

Discussion Paper No 3

私のお釈迦様

坂水昶之
(日本リトアニア友好協会事務局長)

2018年6月

みんなのいのちが輝く社会経済研究会
(中道研究会)

<要約>

- ・この小論文において、「仏教理念」を“幸福社会”のよりどころとする理由について、わたくしなりにまとめてみました。
- ・まず、そのためには、2,500年前にお釈迦様が開かれた「悟り」の中にある重大なヒントに気づくことが重要になります。「四門出游」のお話から始まり、お釈迦様が修行で悟られた摂理とは何かを知らなければなりません。
- ・たとえば、「執着がある限り、苦は消えない」「人は皆平等である」などは、現代の高度に発達した経済社会においても、もっとも基本となる教えです。
- ・また、仏教では「不殺生・非暴力」を教えており、仏教の布教のために戦争をしたことはありません。
- ・仏教のいかなる教義も、新しい科学的発見によって否定されたことはありません。

<キーワード>

悟り、四門出游、執着、一切皆苦、無常、学び、
平等、自己鍛錬、心、不殺生、非暴力、因縁、科学的理論

私のお釈迦様

[はじめに]

この小論文を読まれるにあたって、「仏教理念」をあえて“幸福社会”のよりどころとする理由は何なのでしょう、という疑問を抱かれる読者や研究者の方々が多数おられることと思います。なぜほかの宗教ではいけないのか？ わたくしなりにそれにお応えしてみたいと思います。

祖母が敬虔なカトリックの家に生まれ、カトリック系の幼稚園で賛美歌を歌いながら育ったわたくしが、今でも大切にしているものが聖書にある数々の教えです。

その信仰はこれまでの私の生活や仕事の上で大きなプラスをもたらしてくださいました。おつきあいしてくれた多くの友人たちがクリスチャンでもありました。

でも現在の私は一言でいえば、お釈迦様の大ファンなのです。わたくしたちの研究会は、現在の世界のおかれている社会情勢を大いに改善して、より多くの人々にとって、心豊かで幸せな「幸福社会」の構築のために、どのような経済システムや社会システムが必要であるのかを研究し、発表するグループです。ほとんど心理学や経済学が主体となる研究課題ように見えます。わたくしどもが、この研究会で今回初めて全世界に向けて行う大胆な提案は、今までの研究をお釈迦様の教えによって更に再評価し、将来に向かって明確に方向付けしようという大胆なものなのです。

2,500年前にお釈迦様が開かれた「悟り」の中にその重大なヒントが隠されていることに気が付き、大きな衝撃と喜びを感じたのはもう30年ぐらい前になります。カトリックを捨てたわけではありませんが、わたくし自身は一人の科学者として自らの信仰を、お釈迦様の教えによって更に高めることができていることを、これから順序だててお話しさせていただきますと存じます。

[四門出游]

お釈迦さまは現在のネパールにあたる北インドの山岳地帯でうまれました。ゴータマ・シツダッタというおなまえの皇子です。お釈迦様というのは、そこが釈迦族の居住地であったことから来ています。

お釈迦様は皇子ですから、四面を壁に囲まれた王宮に住んでおりましたが、青年となるに依じて外の世界のこともちろんと知っていなければならぬ、ということで馬車に乗って城

壁の外に視察に出ることとなりました。これを「四門出游」といいます。お城には東西南北にそれぞれひとつの門があったのですね。

ある日一つの門から場外に出て、もうよれよれになった「老人」に出くわしました。お釈迦様は生まれて初めてそのような老人を見たことでショックを受け、御者に尋ねました。御者の答えが、「何人といえども老いるということから逃れることはできません、人は必ずこうなるのです」ということでした。お釈迦様はショック状態となり全く元気がなくなったということです。王様は心配して、では別の門から出て、なにかよいものを見てきたらよかろう、と別の門から出て外側の様子を見てくるように勧めます。

お釈迦様は、別の方向に行けばよろしいのだろうということで、別の門から外に出ます。そこで出くわしたのは、まだ若い男性ですが、見事にやせ細り、息も絶え絶えに苦しんでいる真っ青な顔をした青年です。

お釈迦様は再び御者にあれは何か、なぜあんなに苦しんでいるのか、と尋ねます。御者の答えは「あれは病人というものです」というものでした。これも「老い」とおなじように自らの力ではどうしようもない運命的なものだ、ということです。

2,500年前の世界は、今のように医学が発達していたわけではありませんでしたから、簡単な病気でもすぐ重篤な状態になったであろうことは、容易に想像できますね。

お釈迦様はますますふさぎ込み元気がなくなるばかりです。それでも気を取りなおして、いままで行ったところはきっと方向が悪かったのだと自分に言い聞かせて、次は三番目の扉から外に出ます。そこで目にしたのが葬列です。死んだ人を台車に乗せ、死臭を放つ真っ黒な死体を葬儀場まで運ぶ葬列でした。お釈迦様はおもわず顔をふさぎ、あれはいったい何なのだ？と尋ねます。御者の答えは、「あれは死人です。人は誰でも必ずあのように命を失う時が来るのです」というものでした。

このことがあってからのお釈迦様は、まるで人が変わったようにふさぎ込んでしまいました。

それもそうでしょう。人はいったんこの世に生を受けたならば、なにをしようと、どんな地位にあらうと、病気や老いや死から逃れることができないことを知ったからです。

お釈迦様は悩める若者となり毎日苦しんでおりました。どう考えても人間は、この宿命である「三苦」から逃れるすべがないのです。

お城にはまだ一つの門が残されていました。お釈迦様はある日、意を決してこの門から場外に出ます。そこで出会ったのが「修行者」でした。ぼろぼろの衣服に髪もひげも伸び放題といういでたち、裸足に一本の杖をついています。

しかし顔を見ると、とてもしっかりした表情をし、目はキラキラと輝いています。
お釈迦様はたずねます。一体あの人はなにものか、なぜにあのようななりをしながら、幸せそうな顔をしているのか？と

御者はこたえました。あれは修行者です。世の仕組みを知り、自らを修める修行をしているのです。美しく着飾って、たくさんお金をもって、豊かな暮らしをするほど、「病、老、死」の苦しみは大きくなるのです。あの修行者はその苦しみを消すために、すべてのものに対する**執著**を捨てることが出来たのです。こだわるものがありませんから、心は安らかです。その心の平穏を続けるために、修行を続けているのです。

お釈迦様の心に一条の光が射した瞬間です。

ほどなくしてお釈迦様は皇子である地位を惜しげもなく捨てて「出家」します。すべての宝物を御者に与えて御者を宮殿に帰し、みずからは簡素な着物のままで山をおり、チベットに別れを告げてインドへと降りてゆき、修行のために森に入ってしまった。
お釈迦様が 29 歳の時でした。

[悟りと摂理]

お釈迦様の時代には、文字というものが十分に発達していなかったので、お釈迦様はご自分の修行で悟られた摂理を書き物で残しておられません。教えはすべて口伝で弟子たちに伝えられています。紀元前一世紀ごろになって口伝として伝えられてきたお釈迦様の言葉が初めて書き記されました。それがインドの古い方言パーリ語で書かれた原始経典「**ニカーヤ**」です。この中に、よく流通している「**ダンマパダ**」「**スッタニパータ**」があります。上座仏教の国であるスリランカやタイでは、この中に書かれているお経（教え）が、お坊さんだけでなく一般人たちにも良く知られているのです。

ではお釈迦様が口伝されたことは、これらの古文書ではどのように書き留められているのでしょうか？

多少順不同になりますが少しご紹介させていただきます。

「一切皆苦」

すべての認識の根本にあるものです。人は生まれながらにして死刑宣告を受けて誕生し、病み、老いさらばえ死滅する。どの様な境遇の人もこのことから逃れることはできない。富を得、地位を得ることはこの苦しみを増大することはあっても、それを和らげることは

ない、というものです。ここから仏教の最も基本的な教義である「無常」という悟りがうまれてきたのです。それは、ありとあらゆるものが生成、消滅、変化し、同じところにとどまっていないという、万物がたどる因縁因果のことを総称しています。般若心経の「色即是空・空即是色」というのもこれです。

「学び」はすべてに勝る

人間が心の安らぎを得るためには、自然の摂理や人間の本質について学び続けることが、一番大事であるといっています。そして自分の救済者は自分自身以外なく、修行によって自らの煩惱を消滅させるしか方法がないとも言っています。そのうえ、それが知識としての学びだけでなく、“行動”することによって体得されたものでなければ本物ではない、と言っています。とても厳しい教えです。

「執著」がある限り苦は消えない

人間は物を持っていること、お金を持っていること、人を支配することなどいろいろな欲望に支配されている、知能を持った生き物です。しかもそれをできれば永遠に持ち続けたいと思っているのです。お釈迦様が言っているのは、「その人間の姿そのものが、人間が平穏な心や幸福感を持てない根本源である」という悟りを開かれたのです。

人は皆「平等」である

今でこそ当たり前のことのように響きますが、2,500年前のインドは婆羅門の時代ですから、人はすべてその出生のときから4つのカーストとカーストに属さない非民によって嚴重に縛られ、いかなる場合においても身分を変えることも、身分間で婚姻することも許されませんでした。お釈迦様はその時代に、人はみな平等に生まれ、男も女も生まれてからの努力によってのみ、身分が定まって行くものであるとおっしゃったのです。これは、現代においてもなお達成されない人類の大きな課題であり続けています。

「自己鍛錬」あるのみ

仏様の教えをいくら良く知っていたとしても、それを実践しないひとは自らに勝つことはない、というとても厳しい教えです。だれかとの比較で自分はあの人より優れているとか、劣っているとかいう比較には、全く意味がない。自分はどれだけ自分に勝っているか、ということが一番大事な自己評価の尺度であるといっています。

仏教で「自灯明、法灯明」というような表現でいわれていることが、これだと思われま

「心」を正しく持て

お釈迦様がすばらしいな！と思うのは、真理を求める修行は、一人で行うのではなくサークルやグループを作って、お互いに切磋琢磨しながら行うのが良いとおっしゃっている点

でしょう。その中で生活道徳を正しく保つことの大事さを説いています。**サンガ**という修行者のサークルを持つことは、心正しく生きることを助けるだけでなく、議論しあいながら新しい心理を発見する、という文殊の知恵を教えているとも考えられます。

仏教がお釈迦様の時代から大乘仏教の時代まで、いろいろな人やグループによって哲学、宗教学として発展拡大してきたのは、この教えのゆえであろうと思われま

「不殺生」

仏教にはこの世に生きているものすべてには、それぞれに**命**があり、人はその命を絶ってはいけないという教えがあります。

サンスクリットで**アヒンサー**と呼ばれるこの大事な戒めは、仏教の中心をなすものですが、それはどこから来たのでしょうか？ それはお釈迦様の生誕の更に 1,000 年ぐらい前から古代インドの婆羅門の戒律としてすでに存在し、浸透しておりました。特に人や動物を殺したのものには、重い刑罰が与えられていたと言われています。お釈迦様は当然のこととして、この戒律を取り入れました。動物だけではなく、全て生きとし生けるものには命があり、その命を奪ってはいけないということがお釈迦様のおしえです。

日本では食事の前には「いただきます」といって食べ物の命に感謝いたしますし、お寺では今でも精進料理を食べています。動物を食しません。

[仏教と平和]

仏教はその布教のために戦争をしたことがない、また戦争をする必要のない、唯一の宗教と言われております。自らを修めることを教える宗教が他人に干渉するはずもなく、**不殺生**の教えを守れば、人を殺すことなど決してできる道理がないのです。

ガンジーは当時宗主国であった英国との独立の運動を「**非暴力**」という、最も仏教的な抵抗運動で勝ち取りました。

地球の未来図を描くにあたって、これほど強力な抑止力はありません。敵と同じ数の水爆弾頭を備蓄すれば戦争の抑止力となる、というようなことを言っている現在の地球人は、**3,500** 年前につくられていたインドの戒律から、いまインスピレーションをいただく必要があるのではないのでしょうか？ 戦争そのものが戒律で固く禁止されているのです。戦争のない世界に武器は全く必要がありません。

このサイトには仏教の実践者であられる僧侶の方が担当される専門的な仏教入門が準備さ

れておりますので、お釈迦様が開いた仏教の、それぞれの時代における研究の成果や時代に合わせた発展の成果が、わかりやすく説明されることを期待しております。

【悟りと科学】

技術を勉強し、企業経営の場に居りました私が最後に申し上げたいことは、お釈迦様の開かれた悟りとその後の数々の教えは、他のすべての宗教とは全く異なる出自を持っているという点です。身の回りの世界のありさまをつぶさに観察し、その変化をつかさどる自然の法則を見出し、それを一般化するという真理の探究には、作り話は一切なく、科学的な理論と矛盾するはずのない心理を追求する修行であると言うことが出来ます。

バラモン教という戒律の厳しい、カーストに支えられた古代社会において、お釈迦様がご自分の発見（悟り）を世に問うにあたって、「新しい宗教」という武装をする必要性が、社会的にどうしても必要だったことはわかります。もっと平和的な時代では、「新しい科学的な発見」という拡大の仕方もあったかもしれません。

わたくしは、お釈迦様は

- ・人間とは何か
- ・自然とは何か
- ・それを支配している法則は何か

ということを、偏見のない、今までの定説に左右されない、事実にもとづく観察をおして、それを支配している科学的な心理（因縁）に迫ろうとされていたのではないかと思います。

それは現代でいえば、自然科学、社会科学という分野の仕事であり、ミラクルや作りばなしをつなぎ合わせて人を信じさせようという、人為的な宗教とはその出自が全く異なっているという点です。

仏教のいかなる教義も、科学的な発見によって否定されることがないのは、このようにこの宗教はその原点からして、すべて事実の観察とそれをもとにした論理的な真理追及がもたらした悟り（覚り）だからではないでしょうか？

わたくしたちが、これから地球を支えてゆく時代の子供たちのために残してゆくメッセージをまとめるにあたって、その基本的なセンターポールに仏教を置くことを強く思う理由は、まさにこの仏教の原点にあると言ってよろしいと思います。